

アートが地方都市にもたらした幸福

ニューカッスルとゲーツヘッドを訪ねて

みやもとはつね
ニュージアム・シティ・プロジェクト事務局長

— タイン川の両岸に続く2つの町 —

2005年6月、英国イングランド地方北東部の隣り合う町、ニューカッスルとゲーツヘッドの芸術施設を訪れる機会を得た。この町は日本語のガイドブックにはほとんど紹介されていない。もともとは石炭、鉄鋼、造船で栄えた町らしい。日本国内でもそうであるように、産業構造が変化するにつれ、人口減少、失業率増加などの厳しい状況に陥っていったようである。

私が初めてゲーツヘッドの名を認識したのは1998年2月、ジャパンフアウンデーション主催の地域・草の根交流欧州派遣事業でのロンドン研修中だった。ゲーツヘッドのアーティストシル担当者による巨大パブリックアート「北の天使」(The Gateshead Angel of the North)」の報告を聞いた。福岡

の街なかに現代アートをしかける、という活動を行なってきた立場から、住民が最先端アートにどう反応するか関心を持った。一時的なイベントでなく長期に置かれる巨大作品に対し、近隣住民が反対することは十分ありうる。このとき、「北の天使」はまさに完成直前であった。担当者は、自分たちは自信を持っているが住民の反応に関しては判断を待ちたい、と話していたように記憶している。今回、EU6カ国の文化機関、横浜市、ジャパンフアウンデーションなどの事業で再び欧州訪問に参加することになったとき、訪問先リストにニューカッスルとゲーツヘッドの名を見て、あの天使に会えるのだと密かに期待が高まった。

さてロンドンから空路1時間弱(東京-福岡より近い)、実際のニューカッスルとゲーツヘッドの町は、7年前に

聞いて想像していたよりずっと文化的、芸術的な印象であった。両岸の都市の産業を支えてきたタイン川には、真っ白く美しい曲線を描く「ミレニアムブリッジ」が架かっている。まぶたのようなこの橋は、1日2回ゆっくりと「まばたき」するようにせり上がり、その下を遊覧船がゆるゆると通っていく。川向こうには、かつては製粉所で現在は堂々たる現代美術館「バルティック現代美術センター(Baltic Centre for Contemporary Art)」そしてモコモコした近未来的な外観を持つ音楽ホール「セージ・ゲーツヘッド(The Sage Gateshead)」がある。なんと文化芸術満載の光景であろうか。いささかキレイ過ぎる向きを感じないでもない。

— 巨大パブリックアート「北の天使」 —

訪問はニューカッスルのアーティストカウ

ニューカッスルとゲーツヘッドの間を流れるタイン川に架かる「ミレニアムブリッジ」。1日2回、せり上がり、下を船が通る。川の向こうに音楽ホール「セージ・ゲーツヘッド」が見える 写真提供:筆者(以下も同じ)



ンシル・インングランド・ノースイースト (Arts Council England, North East) から始まった。アーティストの作品がちりばめられたオフィスには、さまざまなアートセンター的な機能がある。毎度、英国のアーツカウンシルの先見性、手厚さには感服させられる。口先目先、小手先ではない、「必要に応じた」「将来を考えた」支援が幅広くなされている。アーティスト用住宅ローン、仕事探し、病院・交通・会社などへのアーティストの関与(例:新しい通りに詩人が名前をつける)。

若いアーティストを支援し、その作品を購入することはアーツカウンシルの重要業務の一つである。それは将来のビジネス的な成功にも関わりと考えられている。このあたりは英国全体がクリエイティブ産業の振興を新しい産業革命的な位置づけにしていることと無縁ではない(もちろん担当者も「アートの専門家」であり、「芸術的なクオリティ」を十分わかっているスタッフである。なぜいまだこういったことを日本では特筆すべきこととして書かねばならないのか、つらいところである)。

次いで、私たちはゲーツヘッド郊外の丘の上で「北の天使」に直面した。

強い風である。観光客が帽子を押さえ上着をすぼめて歩く。天使はあまりにも巨大でかなり離れないと全貌が視界に入らない。広く左右に水平に伸びた両腕(羽根)、優雅にカーブする体躯、のっぺらぼう、金属そのままの外見、建築現場骨格のような凸凹の表面:。すばらしい迫力と緊張感である。

果たして、この作品をほんとうに住民は受け入れたのだろうか。高さ20メートル、幅54メートル、総重量150トン、アントニー・ゴームリー作、1998年2月完成。明らかにアンパランスなこの巨大造形物を可能にしたのは、地域の代表産業であった造船の技術だった。完成前は住民の8割が反対だったが、完成後は住民の8割が支持したと聞いた。自らの産業、歴史への誇りが支持に回った要因だろうか。

文化芸術施設での充実した教育

ニューカッスルとゲーツヘッドでは、「北の天使」以外にもさまざまな文化芸術戦略を掲げている。現代芸術を扱う産業に重点を置くことで、街の活性化、若い世代の人口増加、観光客誘致を狙っているという。ワン・ノースイースト (One NorthEast) という、イ

ングランド北東部における再開発、観光、文化芸術を推進する公的な地域エージェンシーが、今回の現地でのわれわれのコーディネートを担当してくれた。日本からの観光客誘致には、さて何が必要であるか。彼らは真剣である。

英国では「教育」という言葉が日本の「教育」よりも深い戦略を持っているように感じられる。先にあげたバルティック現代美術センターは最先端アートを扱って予想を上回る集客を得ているという。

若い世代、学校からの来場者も多い。また、お隣のセージ・ゲーツヘッドでも公演を行なうだけでなく、教育プログラムになり重点を置いていく。斬新な芸術表現と実地に即した教育

育は、この地域の次世代にとって強いポテンシャルになりそうである。

同様にニューカッスルのウーズバーン地区に8月にオープンした児童書センター「セブン・ストーリーズ (Seven Stories: The Centre for Children's Books)」(訪問時建設中)はユニークな



ゲーツヘッド郊外の丘に立つ「北の天使」。高さ20メートル、幅54メートルにおよび、近くからでは全貌が視界に入らない。地元産業を応用してつくられた

参考文献

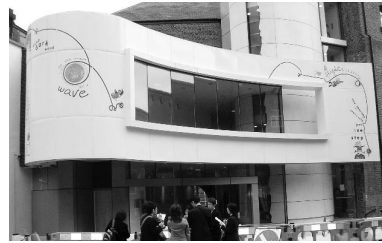
- 1 普伸子「イギリス Newcastle Gateshead 現代芸術によるゲーツヘッドの勇気ある復興計画」、「海外ケーススタディ 芸術文化の非営利活動/地域振興/制度」(2005年3月、発行・財団法人地域創造、編集・株式会社文化科学研究所、東京)
- 2 桜井武「英国美術の創造者たち」(2004年5月、形文社、東京)



施設になりそうだ。過疎化エリアの活性化、アートとコミュニティ融合をねらった子ども向けの文化スペースで、書店、展示室、学習室、メディアセンター、ミーティングスペースのほか、子どもカフェがある。

アート戦略とアーティストの関係

ところで、この地のアーティストにとって、アート戦略は実際どう感じられているのだろうか。比較的公的なスペースを巡っていて、私は若干の疑問を抱いた。そして、最後に訪れたのが、アーティスト（家具デザイン）のニック・ジェイムズが中心となった、スタジオ兼ギャラリースペース「マッシュルーム・ワークス（Mushroom Works）」だった。



彼はアーツカウンシルから援助を受けるとともに、「アーティスト個人のビジネスプランが銀行から採用」されて融資を受けている。「銀行から融資！」われわれ一行は色めきたった。果たしてそれは英国では普遍的なことである

や否や。彼は穏やかに答えた、やはり珍しいことであると。

地元出身のニックは、昨今のニューカッスルのアート景気を見て、この地でアートで食べて

いけるかも、と戻ってきたらしい。そして新スペースを立ち上げた。でも、やはりまだまだ厳しい。そう言いつつも、各地のデザイナーズブロックで発表しているニックには、揺るぎない自信が感じられた。

文化による活性化というとき、アーティストの立場はどうなるのだろうか。たとえば、マッシュルーム・ワークスとバルティック現代美術センターとの間にはどんな関係がありうるのだろうか。これらは連動している動きなのだ

ろうか、最後にそれが気にかかった。

地域住民の幸福と文化芸術

私の住む福岡県も、石炭・鉄鋼をベースに発展した地域である。いま、炭鉱がなくなり、製鉄所が消え、県内各地で人口が減っている。同じような現象は日本、世界の各地に見られている。今回の別の訪問先、リール（フランス北東部）も同様の歴史を持つ町であった。そして、この街も文化芸術による街の活性化を図り、2004年欧州文化首都（EU加盟国から毎年1都市を選び、芸術文化に関する行事を開催、相互理解を深める制度）として多くの芸術イベントを行なった結果、観光客の増大、雇用の創出という大きな成果を得た。

いったい、本当に「文化芸術」は街の活性化、産業の再生、雇用の創出、要するに人々の生活安定と幸せにつながるのだろうか。それは「アート」にとっても意味があることなのだろうか。ニューカッスルとゲーツヘッドという、それぞれ26万、20万の人口を持つ二つの町で、これだけさまざまなバリエーションで文化的な試みが行なわれている。日本の大都市以外の地域でも十分、可能性はあるだろうと期待したい。

〈↑右〉「マッシュルーム・ワークス」内ギャラリー。左がニック・ジェイムズ氏。アーティストの作品を展示販売している（週末のみオープン）

〈↑左〉ウーズバーン地区にある「セブンストーリーズ」（訪問時建設中）。過疎化エリアの活性化、アートとコミュニティ融合をねらった子ども向けの文化スペース



みやもと はつね ●九州大学卒業。1983年ごろよりアート活動を開始。ミュージアム・シティ・プロジェクト（MCP）にて、1990年よりボランティアスタッフ、常駐スタッフを経て、98年より現職。2004年からは、（財）福岡市文化芸術振興財団「ギャラリーアートリエ」をMCPとして企画運営。各種アートプロジェクト企画、運営、広報等コーディネート業務等を行なう